

能・狂言

■ 響の会「木賊」

亡き観世寿夫の衣鉢を継ぎ
硬質な謡と舞に優れた名手・
山本順之が難曲「木賊」で観
客の知情意に訴える秀演を見
せた（3月30日・鉄仙会能楽
研修所）。

出奔したわが子を偲び狂気
する老人は愛児形見の衣装を
身に着け懐旧追慕の舞を舞
う。修辞と作曲は優秀だが作
品構成に劇的破綻が散見され
るこの大曲は構築力次第でさ
まざまな「顔」を見せる。主
演者には卓越した手腕が必要
だ。声を損じていた山本は前
半不調で失策もあったものの、
扮装を改めた後半はしたた
かに復調。喉ではなく息と
腹力を使った当代まれに見る
骨格強固な謡の力で屈折した
憂愁を隈取った。

「白髪の子児」の異装は老
父自身の「回復不能な若さ」



わが子を思い狂い舞う老翁の山本順之

写真 吉越 研

山本順之、知情意に訴える秀演

への執着を緋い交ぜた妖しい
鬱情を映す演出。ここで山本
の舞姿は上質の濃茶のように
我々を覚醒させる。背筋正し
い鋼鉄の体幹を印象付ける序
ノ舞の二段目、自らの心を扇
に映す客観性が秀逸。確かな
身体造形と「離見」の知性を
堅持する山本の至芸は切れば
血の吹き出る狂熱を封じ込め
たもの。時として自己崩壊の
絶壁にすら臨んでみせる冷熱
の二律背反は寿夫の芸の精華
の再来だ。ここに立ち現れる
のは衆意に媚びない緊張から
生ずる批評性。これこそ厳格
な身体様式に基づく能の本質
的演劇性だろう。

「響の会」は早稲田大学内
サークル出身の能役者・西村
高夫と清水寛二が共宰する演
能企画。二人は寿夫晩年の弟
子で、山本は大学時代の師で
ある。この日の地謡
は清水と西村が核と
なって、特に後半は
強靱な内攻性を貫き
「語る」姿勢を死守。
ここにも自己陶醉と
は遠い知的構築が成
り立っている。

（演劇評論家

村上 湛）